無政府主義の父 大杉榮

掲載禁止

行動を脅迫し思想を脅迫し研究を脅迫した結果は何が生れるかそこには盲動と憤懣との對峙があるのみであらう。本紙が今年初頭以來連載した大杉榮君執筆「無政府主義の父」は第二編に入り僅に三回を掲載しただけで突如其筋から掲載中止の内達を受けた。その内容は既載の分には遡らぬが爾後の分に對しては場合に依り處分案に問ふてあらうと云ふのである。役人の頭――それは必ずしも正確なものでない、まして時局が混亂する程彼等の頭が混亂疲憊する。その極端に疲憊し混亂した頭から出る施政や措置に對し[illegible]を試みることは稍兒戯に類して居るばかりでなく、更に[illegible]まれることは一層危險を感ずるが故に。大杉君の「無政府主義の父」も多少危激な點は改訂補綴して掲載しても差支ないやうなものであるが。例の役人の頭と睨みとの前に差出すことは一層の危險がある萬一讀者諸君に對する報導の任務がその爲めに防止するやうなことがあつては一大事であるから斷然今日以後掲載を中止する。但し僅に本紙に依つて辛うじて無政府主義の經過と輪郭とを知り得た人々は今日以後、今の役人の頭の變らぬ限り永久にその便を奪はれたことは深く遺憾とする處である――之れも已むを得まい……

殘らず罪状自白

不穏文書犯人森本武は 三日午後四時若松町分監に收監

難波署に於て取調中の不穏文書犯人大阪高等商業學生森本武(二一)は其の後引續き同署の横地高等主任の係りで嚴重なる取調べを受けて居たが二日午後六時頃からソロ〳〵口を開き社會主義思想に浸するに至つた徑路から語り出し三日午前十時大阪地方裁判所より檢事出張して同署樓上に於て物的證據としての森本の筆蹟及び日誌雜記類秘密出版物等を突きつけられ遂に該文書起草の委細及び發送の顛末を殘らず自白に及んだ後檢事は直に起訴豫審に附し豫審判事の令状を執行し午後三時若松町分監に收監したり一方共犯大濱府金局員中西一夫(二)も午後四時頃より長時間に亘りて取調を受けつゝあり

上海から來た怪の邦人が 捨てゝ逃げた大鞄

三日横濱に入りし天洋丸の二等客が 遺して去つた過激派の宣傳文と密書

犯人は東京へ其背後に潛む黒影

一時姿を消して居た露國共産黨政府の密使が昨今又候羅紗商人あるひは貿易商人等に變裝し敦賀神戸長崎等を經て續々

京濱方面に 潜入し來り在留露支人及日本社會主義運中と氣脈を通じ赤化運動を行はんとしつゝある形跡があるので數日來警視廳外事課では神奈川縣警察部と協力し密々活動を開始すると同時に敦賀神戸其他海外各關係港の日本官憲に打電警戒方を依頼する等之が

取締に努め つゝある折柄去る三日夜香港から横濱に入港した東洋汽船株式會社の天洋丸二等客室より鼠色背広に黒のオーバを着た風体怪しき一名の日本人が上陸し臨檢の税關員の目を掠め攜帶せる

大トランク を小脇に抱へ檢査も受けず通關せんとするより税關吏が之を見咎めて取調べんとすると忽ち彼の男は件のトランクを其場に投捨てた儘何處へか逃走して了つたので早速トランクを開披して調べて見ると中には

露國共産黨 政府の作製した露英並に日本文字の過激極まる宣傳ビラや共産黨主義に關する雜誌の外在上海露國共産黨本部から内地の社會主義者某々等に宛た密書等が充滿して居たので忽ち大騒ぎとなり嚴重

探査の結果 右の曲者は原籍石川縣石川郡弓取村字下安江安井外茂雄(二四)で去る大正七年五月頃敦賀から浦塩に渡航し最初は同地キタイスカヤ街一四で時計商を經營して居たが其後ボルシヴイツキと通じニコリスク、パパロフスク、ブラゴエンチエンスク等を轉々した揚句一昨年十月頃

上海に渡り 前記共産黨本部に出入し時折香港其他東支那一帶を股に掛けてさかんに共産主義運動に沒頭してゐたものである事判明し今回上海本部の重命を帶びて香港から横浜に潜入して來たものらしく

其後東京に 逃げ込んだ形跡があるので目下警視廳特別高等並に外事の両課が協力して同人の行方を嚴探中なるも未だ逮捕に至らない

毛皮行商の不思議な露人

出沒自在で見當がつかず その數は段々殖ゑる許り

赤化宣傳の噂が高い

横濱、神戸を始め殆ど日本全國の都市に亘つて毛皮の中から顔を出したやうな髯ムジヤの露國人がむき出しの羅紗を担いで賣り歩いて居るがこれ等露國人は

羅紗行商の 名の下に日本の赤化を企てやうとして彷徨してゐるものであるとの噂があるので策源地であり移入地である横浜神戸等の開港場の警察では極力探つてはゐるが何處から這入つて何處の品物を賣り歩いてゐるのか少しも見當が付かずその筋では鋭意その取締及監視につとめてゐるがその數は益々

殖ゑる許り で寧ろ一ツの不可思議視されてゐる、それについて横浜警察本部では「さういふ噂があるので警戒はしてゐるが彼等は何處から出て來るのか判らない果して夫が赤化宣傳の爲であるとすれば容赦なく退去命令でも出すが今の処ウヤムヤで目下調査監視中である」と語つた(横浜)

過激化の徑路自白

廿一才の少年 今更罪状に戰く森本

不穏文書犯人森本武は依然難波署で取調べられてゐる、二日夜までは事の重大を考へて主要な分の自白はしなかつたが森本の義兄長崎商業教諭森本兌氏の許へ身の振方の相談に赴いた際「不穏文書を中島一史に認めさせてソレを自分が高麗橋郵便局に投函發送した」こと物語つた事實を教育家である兌氏は何事も包まず赤裸々に野田署長まで申立て森本には『自分に語つた一切を偽らず述べて寛大な處分を願へ』と諭して引取つた明白な事實があり、前後の條理を正して取調べられた結果三日朝漸く社會主義を研究するに至つた動機から文筆の達者なそして少年に似合ず大杉榮著のソヴイエト政府、社會主義、赤色露國等の研究をしてゐる中島に不穏文書を起草せしめた旨を自白するに至つたらしいが未だ自分が右文書を封入して第十六師團長、平の郷青年團並に他の青年團體やら京都の高貴方面へ發送した該所だけは自白せないさうである

中島は最初から罪状を殘らず自白してゐるので拘留期限の切れた三日檢事局へ送致する筈であつたが本人の希望と森本の自白の都合から拘留期限を一週間延長する事になりソレがため多分森本と同時に檢事局へ送らるゝことに變更された模様である、森本中島等は不穏文書の發送は容易に判らないもので假りに差出人が判つた所で左程重大問題にもならぬ考へでホンの過激化した悪戯から思慮もなくやつたものらしく『こんな重大な事になるとは夢にも思つてゐません』といつてゐたさうで最初は輕く一切を述べ叱責されて濟む筈だつたが案外大問題となつてゐるところから口を噤んで係官を手古摺らしてゐたのであつた